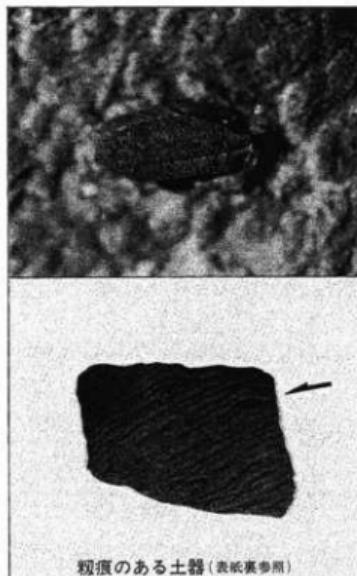


糸
—

MOMI



孔痕のある土器(表紙裏参照)

目 次

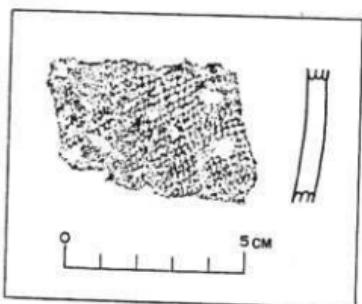
- 宮城県岩出山町片岸遺跡出土の
弥生式遺物について…佐藤 信行 … 1
藤原 二郎
- 宮城県名取市手倉田遺跡出土の弥生土器……太田 昭夫 … 12
- 宮城県名取市宮下遺跡採集の弥生式土器 …… 興野 義一 … 16
石黒伸一郎
- 底部に穿孔のある弥生土器……………太田 昭夫 … 18
- 宮城県刈田郡蔵王町松川流域における
弥生時代遺跡の分布調査(1)…須藤 隆 … 21
長谷川 真
相原 淳一
田中 敏

第 2 号

1980

弥生時代研究会

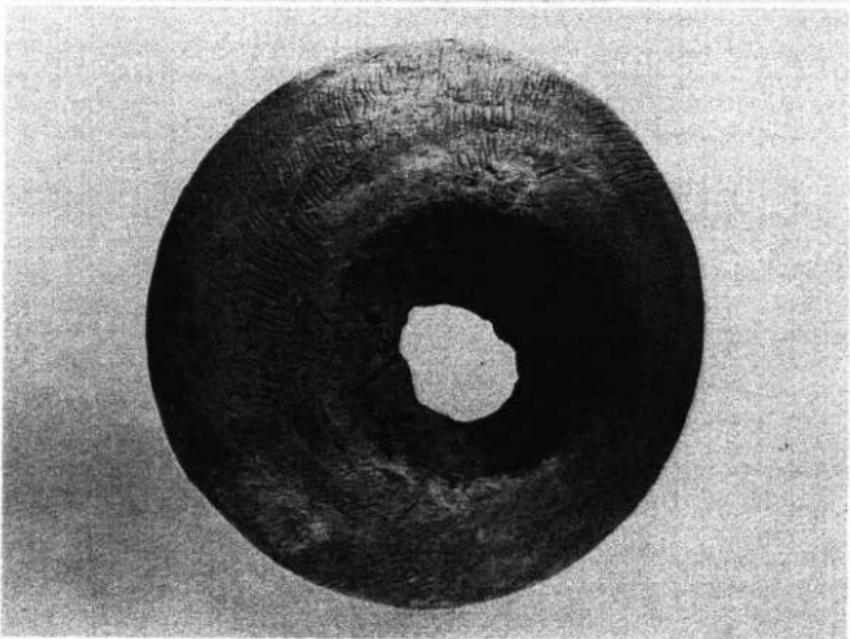
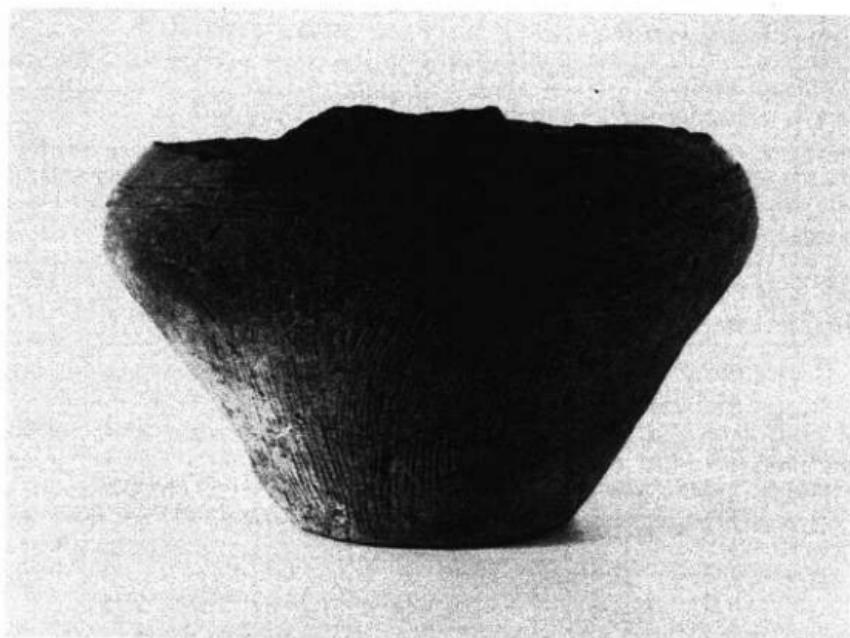
粗痕のある土器



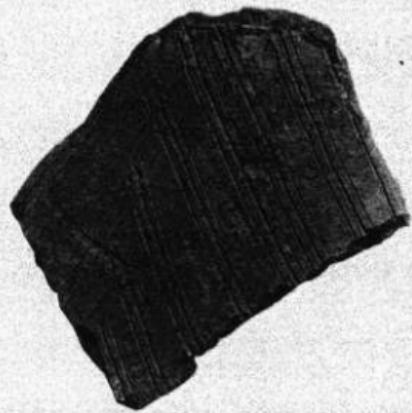
藏王町円田大橋遺跡において、中橋彰吾氏が採集されたものである。壺の体部破片と考えられ、外面には L R 原体の単節繩文が施されている。焼成は良好で、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい赤褐色である。粗痕は外面にみとめられる。大きさは、長さが 6.5mm、幅が 3.1 mm である。大橋遺跡は、塩釜式期の堅穴住居跡が発見されたことで著名である。弥生土器はこれまで、主に円田式と天王山式が出土している。本資料をお貸しいただき、掲載を快諾された中橋氏に厚くお礼申し上げる。なお、表紙の拡大写真と文中の粗痕の計測値は須藤隆氏の手によるものである。(太田昭夫)



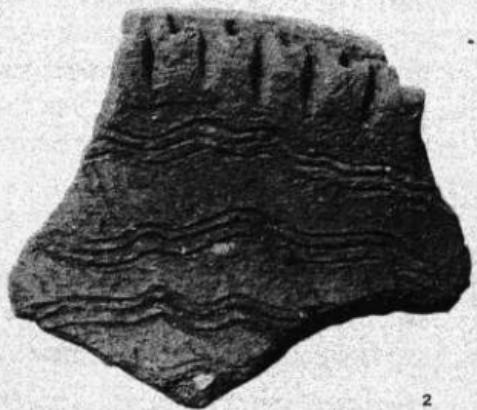
本誌掲載遺跡の位置図



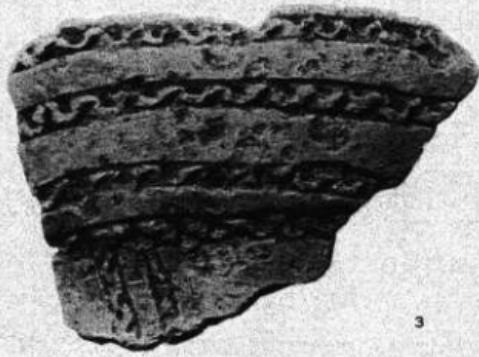
図版 1 (太田報文 P18 参照)



1



2



3

図版2 (奥野・石黒報文 P16 参照) 一奥野撮影一

宮城県岩出山町片岸遺跡出土の弥生式遺物について

佐藤 信行・藤原 二郎

1

片岸遺跡は、玉造郡岩出山町下一栗字蛇王団地内にある。遺跡付近は、通称「片岸」と呼ばれており、蛇王団地内には、他に縄文中期の遺跡が発見され蛇王田遺跡と命名されているので、本遺跡を片岸遺跡と命名した。

遺跡は、岩出山の中心地から北へ、約1km、岩出山町立上野目小学校の西北、約300mの地点にある。

遺跡は、荒雄岳に源を発する荒雄(江合)川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、荒雄川の両岸に発達した入り組んだ丘陵に阻まれ、遺跡付近では江合川に沿って約1.5kmの細長い帯状に形成されている。

江合川の両岸には、旧石器時代から歴史時代に至るまで切れ目なく、多くの遺跡が存在し、以前より注目されてきた(興野・遠藤: 1970)が、この江合川の河岸段丘上に多くの遺跡の存在が知られたのはそれより後のことである。特に、1970年頃から始まった上野目地区の県営圃場整備事業により、縄文中期から平安時代にわたるかなり大規模な遺跡群が発見されており、



第1図①片岸遺跡 ②一本杉遺跡 ③境ノ目B遺跡

(2.5万分の1、同渡、真版)

④境ノ目A遺跡 ⑤要害E遺跡 ⑥要害F遺跡

⑦九十九沢遺跡 ⑧西天王寺遺跡 ⑨下諭遺跡

その内、玉造遺跡は宮城県教委による発掘調査が行われ、貴重な成果が得られている(小川: 1979)。

ここでは、本稿と関連する付近の弥生時代遺跡についてのみ述べる(第1図)。

一本杉、境ノ目A、要害E、要害Cの各遺跡は、いずれも片岸遺跡と同じ自然堤防上に営まれた遺跡で、形成時期はいずれも弥生初期から、楕円形圓式、円田式にかけてのものである。九十九沢、西天王寺、下鎌遺跡はいずれも江合川北岸の丘陵上に位置する。形成時期はいずれも天王山式系である。

2

片岸遺跡は、従来未見の遺跡であった。たまたま昭和52年、上野目地区一帯に行われた宮城県宮園場整備事業に際し、藤原が新たに発見したものである。遺物の採集は昭和52年冬から、53年春にかけて行い、次に紹介する弥生式土器及び石器類を得た。

遺物の出土状況は、遺物地内に切られた水路断面の観察によると次の如くである。

I層：表土。厚さ約20cm前後で遺物をほとんど含まない。

II層：鉄分を多く含む層。厚さ1cm前後で磨耗した土器細片をわずかに含む。

III層：黒褐色シルト層。遺物包含層。厚さ5~20cmで平均10cm。木炭小片を若干含む。

IV層：礫層。本層上面の処々にグライ化した青灰色粘土層、砂層が介在する。遺物は含まない。

遺跡のひろがりは遺物の散布、包含状態から見て20m×20m程の範囲で比較的小規模な遺跡であったと思われる。

3

片岸遺跡から藤原によって採集された遺物の量は平箱で約1箱分である。内訳は、石器25点、フレーク多数、土偶片1点の他はすべて土器小片である。他に遠藤智一氏によって採集された石錐、及び土器出土地点から50m程離れた地点から単独に採集された磨製石斧を加えて概述する。

土器

(器形) 採集された土器片はいずれも小破片で器形の判別できる例は少ない。

甕、鉢、高環、壺、蓋形土器等が識別できる。甕、鉢類が大部分で他の器形はいずれも数個体しか確認していない。

(色調) 褐色、暗褐色、黒褐色、灰褐色、茶褐色、赤褐色、橙色を呈するものがある。後に述べる2群A類、3群B類、4群C類、付加条縞文を有する土器は、赤褐色、橙色等の明色

を呈するが他の土器群は暗褐色、黒褐色、灰褐色等の暗い色調のものが多い。

〔器面調整〕 遺跡付近は永らく水田として利用されてきたため、土器の保存は極めて不良で、器面が荒れて観察不能のものも多い。全般的に、沈線文、磨消繩文のある土器は表面、内面ともミガキが主体となり、他の土器群は表面、内面ともミガキ、ナデによるものが多い。なかには内面に砂粒の移動の痕跡を明瞭に残す、ケズリに近いラフなナデの行われたものやケズリのものもわずかに認められる。

土器の厚さは4mmから8mmまであり、5~6mmが大部分を占める。

朱彩の痕跡のあるものは器面が極端に荒れているためもあって肉眼で確認できる例は存在しなかった。

文様の表現方法には、繩文、付加繩文、燃糸文、刷毛目文、沈線文(範状工具、半截竹管状工具)、磨消繩文、刺突文、刻目文等がある。沈線文、刺突文等については分類の項で後述するのでここでは主に地文として用いられた繩文、刷毛目文等について述べる。

繩文：1点が無節と思われる他はすべて単節繩文である。繩文原体には、L?、LR、RLがあるが、L?、RLはいずれも1点のみでLR回転による左傾繩文がほとんどである。

縱走するものも1点ある。節の大きさは、1mm~3.5mmまであり、1.5mm前後が多い。条間は、1mm内外である。甕の主文様、又は沈線文土器の地文として最も出土点数が多い。

付加繩文：左傾又は横走するものが多い。繩軸の太軸から太軸までの条間は、2.5~4mmである(第3図15~18、20~22)。出土点数は、繩文につぐかいずれも脣部片である。

燃糸文：原体は1mm以下と2mm前後の2種があり、いずれもR回転による右傾の圧痕が得られている(第2図34、38)。

刷毛目文：口縁部から、ほぼ全面に及ぶと思われるものと、沈線文の地文として用いられる場合がある。条の幅は、0.8m~1mm程度、条間は1mm前後のものが多い。条の方向は、繩文の走向とは逆に、右傾するものが多く、左傾するものも若干見られる(第2図28、30~32、第3図19)。

底部：総数で16点ある。内訳は、木葉痕7点(内、体部に刷毛目文をもつもの1点)、網代痕4点(内、磨いて消しているもの1点)、布圧痕2点、織維束圧痕？1点、無文(ミガキ)1点、不明1点、他に高坏と思われるもの2点がある(第3図23~29)。

次に、主に文様上の特徴から5群に分類して記述する。

第1群土器：太い範描沈線により、変形工学文が描かれる(第2図1)。口唇部にも1条の平行線が巡り、器の内、外面は研磨される。器厚8mm。本群は1点のみで、その器形、文様から繩文晩期末~弥生初期にかけてのものと思われる。

第2群土器：沈線文を有する土器(第2図)

A類—ミガカれた表面にシャープな1条描きの沈線により渦巻文、方形文、鋸歯文、連弧文、平行文等が描かれる。これには、線間6~8mmのもの(9~14)と、4mmのもの(15)がある。後者は1例のみである。線の幅は、0.6mmから1.3mmまである。

B類—LR繩文を地文として、細い覚描沈線により変形工字文風鋸歯文等が描かれる(6, 24~26)。

C類—平行文のみが、器体の口縁～頸部に巡るもの。平行文は、2~5条のものが見られ、地文は、繩文を施すもの(19, 21, 27)と、無文(ミガキ)のもの(20, 22, 23)がある。口唇に繩文をもつものもある(23)。

第3群土器：2本同時施文による平行線文を有するもの(第2図)

A類—先端が2叉、又は2本の箒状工具により、2本同時施文による平行文、鋸歯文が描かれる。地文は、無文(3)と、LR繩文のもの(4, 5)、刷毛目文のもの(28)がある。線間は4~6mmまである。

B類—細い半截竹管状工具により、連弧文風平行文が描かれる。(16)は、口縁内面にも施文があり、(17)は、文様帯下部に繩文が施文される。線間は、両者共2mm前後である。

第4群土器：磨消繩文を有する土器(第2図)

A類—斜行沈線間の一部に繩文が見られるもので、繩文施文後、沈線で区画しその一部をミガいている(2)。

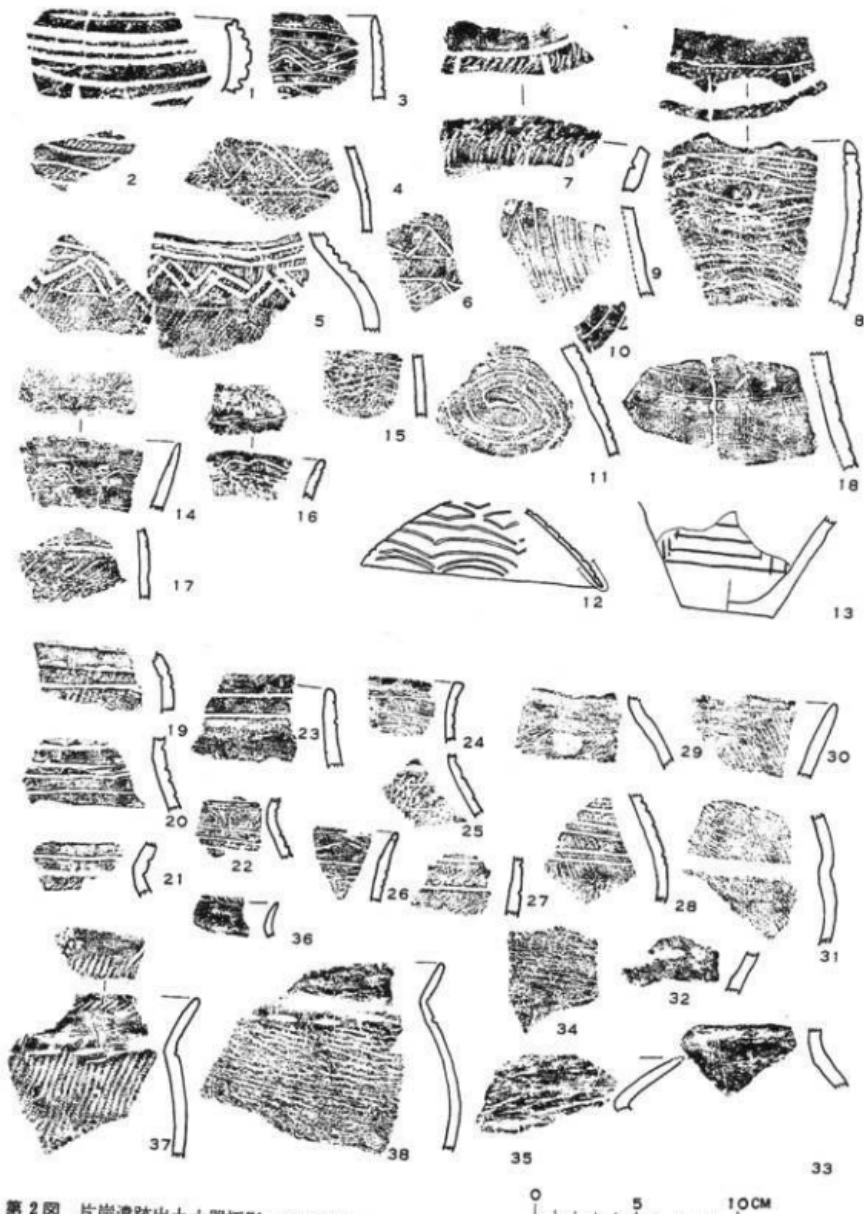
B類—表面に繩文、又は繩文を地文として平行文と連弧文が重層して見られるもの。口縁は、小波状口縁をなす。口縁内面に、幅1cm内外の繩文帯が巡り、その下限を一条の平行文によって区画している。波状口縁の頂点部で、縦の短線がその繩文帯を切っている。口唇に、繩文が見られる(7, 8)。

C類—細い沈線により、直線的なモチーフが描かれ、モチーフの一部に細い繩文に類似した文様が見られる。この施文原体は、繩文と異なり、植物茎回転文(須藤: 1973)かと思われるが確認していない。尚、この回転文は、沈線文施文後に行われた、いわゆる充填繩文である(18)。

第5群土器：第2群～第4群土器以外の土器群を一括した(第3図)

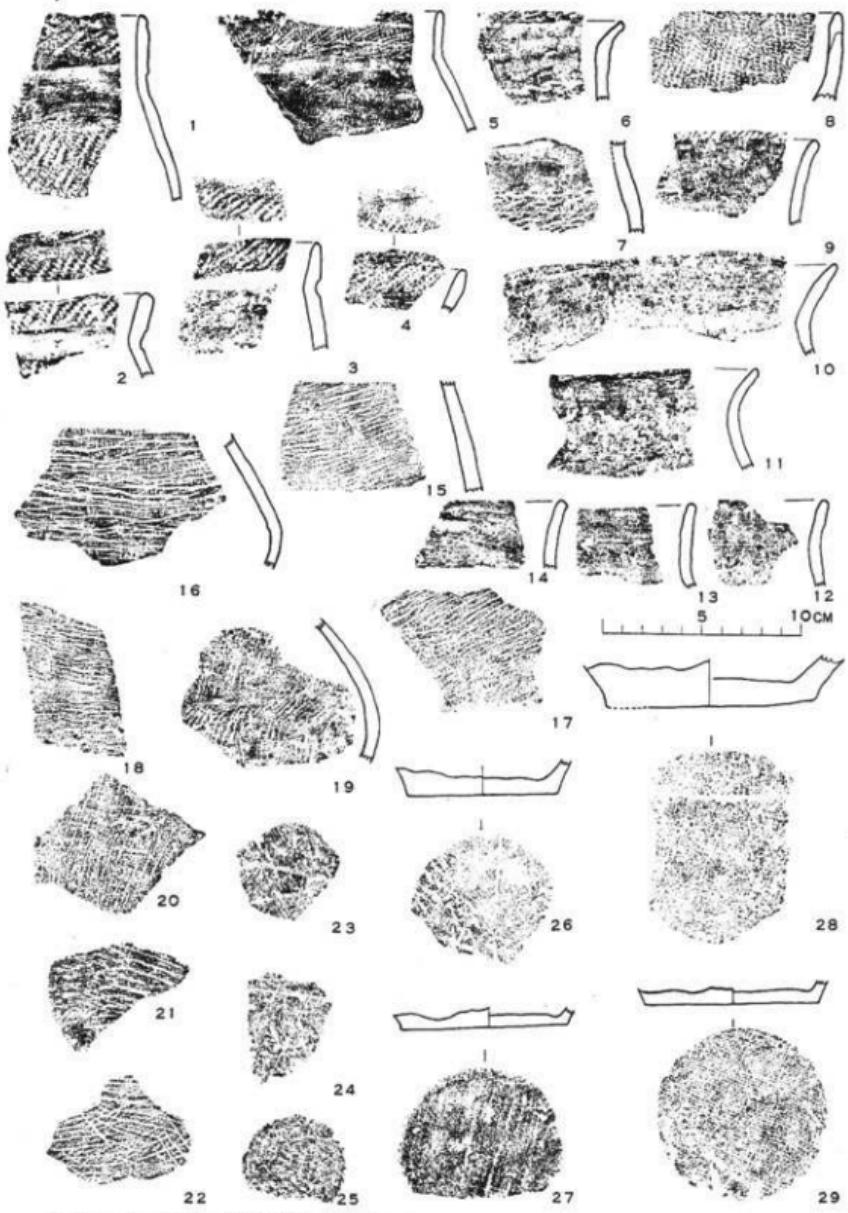
A類—口縁部が外反する壺と思われる。これには、口縁および頸部が無文(ミガキ、ナデ)で口縁が軽く外反するもの(9, 12~14)と口縁、頸部が無文で、口縁部が強く外反するものがある(10, 11)。口縁に刻み目を有するものもある(9, 10)。

B類—口縁部が「く」の字状に強く外反し、胴部がややふくらむ壺で頸部に、長楕円状の刺突列点文が巡るもの。列点文下部に、LR繩文の施文されるものと、撚糸文の施文されるものがある。前者には、口縁上部と内面にも、約1.5mm幅で繩文が施文される(第2図37, 38)。

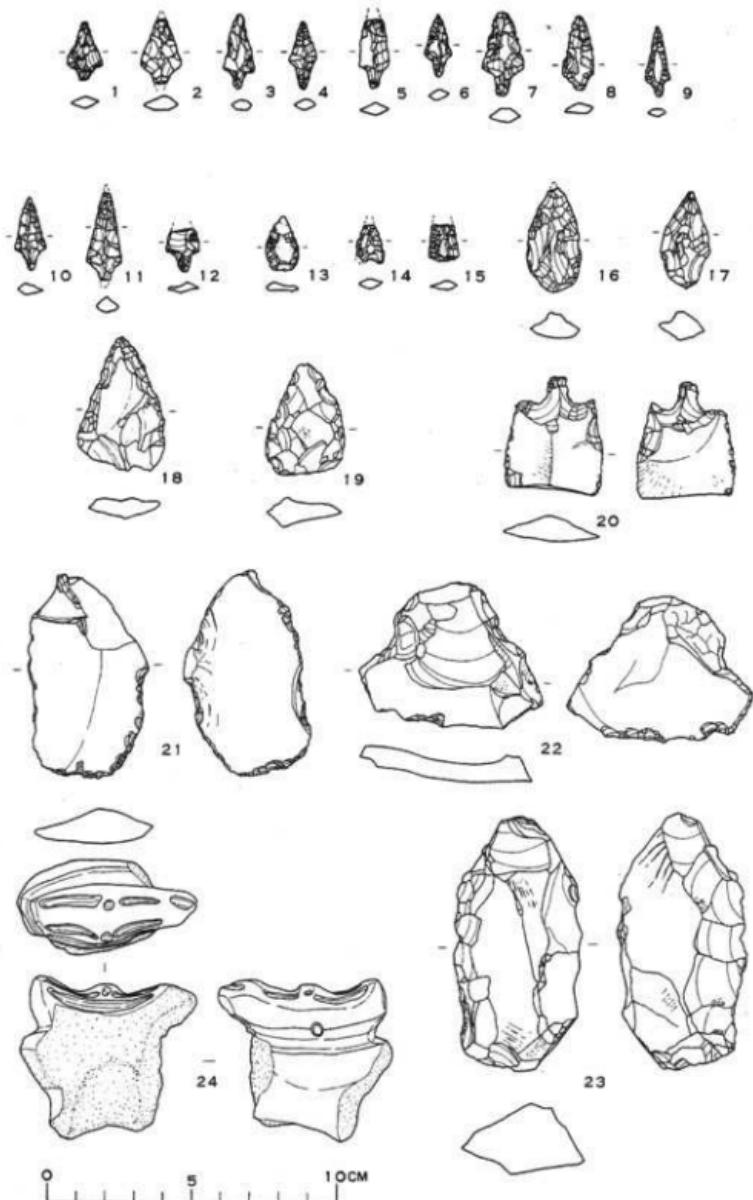


第2図 片岸遺跡出土土器拓影・実測図(1)

0 5 10 CM



第3図 片岸遺跡出土土器拓影・実測図(2)



第4図 片岸遺跡出土石器・土偶実測図

C類一口縁に段を有するもの(1～3), 口縁は直立するもの(1)と, 外反するもの(2, 3)があるが, いずれも縄文施文後に, 頸部を磨いて縄文を消去し, その際, 口縁下部を強く削り出し, 段を作り出している。但し3は, 頸部以下磨滅して観察不能。無文の可能性もある。口縁内面に, いずれも幅1～1.5cmの縄文帯が巡る。

D類一口縁は短く外反し, 頸部無文(ミガキ)で, 胴部に付加条縄文やLR縄文?が施文され, その上端に原体の結節が一条巡るもの(6, 7)。6は口縁部に縄文が見られる。

E類一口縁が内背し, 全面的に縦走する縄文が充填されるもの(8)。

F類一口縁が強く外反し, 撫糸文が施文されるもの(第2図35), 口縁が直行し, 口縁部に細い縄文が施文され, 頸部以下が磨れるもの(5), 口縁が外傾し, 口縁外面, 内面, 口唇に縄文が施文されるもの(9)等がある。第2図35や9は, 斧の可能性が強い。

石器

石鎌：14点採集されている(第4図1～12, 14, 15)。

A類一基部は、「Y」字状の凸基を呈し, 長さに比して身幅の広いもの(第4図1, 2)。

B類一基部は、「Y」又は「T」字状の凸基を呈し, 巾に比して身の長いもの(第4図3～12)。

3～8を除いて, 入念な調整剥離が加えられている。

C類一基部にえぐり込みを有するものと, 僅かに基部が突出するもの。両例とも, 一部欠損している(14, 15)。

石槍？

A類一身の部厚い, 小形の木ノ葉形を呈するもの。両面共, 入念な二次調整が加えられ, 先端は, かなり尖鋭に製作されている(16, 17)。

B類一A類より薄身で, 基部は, ほとんど未調整のもの。一次剥離面を大きく残し, 片面は余り手が加えられていない(18, 19)。(13)は, 本類を小形化したようなタイプである。

石匙：縦長の剥片を中断し, 打面を調整して, つまみ部を作り出している。側縁には, 細い剥離痕が見られる(20)。

不定形石器：横長剥片の周辺に, 細い剥離痕が見られる不定形石器, 又は搔部(21, 22)。

打製石斧：部厚い素材の側縁及び先端に, ラフな二次調整が加えられるもの(23)と, 大形疊を素材とし, 一方の側縁と先端にラフな二次調整が加えられ, 片面に自然面を大きく残すもの(第5図2)がある。

凹石：円礫の片面中央部に2個の残り凹みが認められる(第5図1)。

石鑿：やや扁平な円礫の長軸両面に, 深い幅広の索溝を有する(第5図4)。

磨製石斧：頭部は, 細く尖り気味で, 胴部は先端に行くに従い幅が大きくなる。刃部は中央部が直線的で, 両端に丸味がある。横断面は厚みのある橢円形で, 縦断面は, 両端が尖り気味

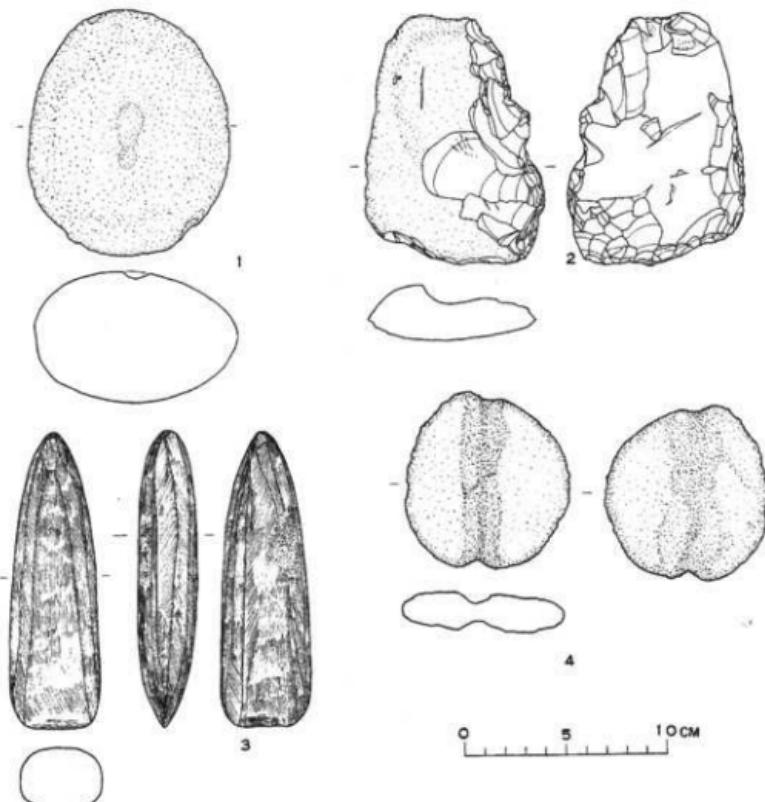
の長方形を呈する。一部に、原石面を僅かに残すが、全体に入念な仕上げが行われ、全面に継又は、斜めの擦痕が残る。

土偶：かなり磨滅した頭部破片。顔面は、剥離して不明であるが、頭部は結髪の状態を示す。

4

以上、概述した片岸遺跡出土土器の編年の位置について、若干予測しておく。

まず、本遺跡の土器に表現される文様には、縄文、付加縄文、燃糸文、刷毛目文、沈線文、磨消縄文、刺突文、刻み目文等がある。本遺跡で、比較的多く見られる付加縄文は、宮城県では円田式、十三塚式と呼ばれる型式に顯著で、福島、茨城でも中期末から後期前半に盛行する。刷毛目文も、宮城県北地方ではまれな存在である。



第5図 片岸遺跡出土石器実測図

沈線文を持つ土器は、線の太さ、間隔、施工工具の相異から、5類に分類した。2群A類はシャープな一本描きの沈線で渦巻文等が描かれることから、いわゆる円田式の仲間に含められよう。この型式は良好な資料に恵まれないが、県南部の下永野(白石市: 1976)、北沢(宮城県教委: 1978)遺跡等で、ややまとまった資料が発見されているにすぎない。2群B類、C類は、特に型式名をあげることはできないが、B類に近似したものは樹形圓式に認められる。

3群A類は、モチーフ的に近似したもののが、秋田県宇津ノ台遺跡(須藤: 1970)に認められるが、宇津ノ台遺跡例は、対描きの一本沈線である点で異なる。B類は、宮城県で十三塚式と呼ばれているものに極めて近い。

4群B類の特徴は、樹形圓式土器に一般的に認められる。C類は、樹形圓式及び福島等で樹形圓式併行の土器に見られる。

5群B類は、仙台平野を中心とした地域に顕著で、弥生初期のいわゆる福浦島下層式から、樹形圓式期にかけて盛行する。円田式にも僅かに伴うらしい。D類は、県内部を中心に分布する円田式、及び十三塚式に顕著に見られる。付加条繩文を有する土器の過半は、本類に含まれると思われる。

以上、要約したように、片岸遺跡の弥生式土器には、弥生初期から十三塚式期にかけての、極めて長期に及ぶ文様要素を指摘できる。これらの土器群を、時期的に、どのように統合、分離するか現段階では、資料的な制約があって無理である。但し、大まかに観察した限りでは、弥生中期後半の樹形圓式、円田式を中心とした時期と推定することは可能であろう。

石器には、石鎌、石槍、石匙、不定形石器、打製石斧、凹石、石錐、磨製石斧等がある。いずれも、繩文時代に一般的な器種によって構成される。仙台平野では、樹形圓式期に石庖丁、大隆系の磨製石斧等の弥生式に伴う石器が普遍的になると言われているが、本遺跡では、全く認められなかった。

なお、藤原は片岸遺跡の付近で、境ノ目A遺跡を発見している。境ノ目A遺跡からは、片岸遺跡と極めて類似した、良好な土器、石器群が得られている。境ノ目A遺跡の資料も、近日中に発表の予定で現在整理中である。その際、片岸遺跡の土器、石器についてもあわせて検討したいと考えている。

なお、石器の実測、及びトレースは、太田昭夫氏の手をわざらわせた。石器実測図のうち、第5図3、4は石黒伸一郎氏原図である。第5図4の石錐は、遠藤智一氏蔵品である。ともに銘記して厚く御礼申し上げる。

本稿は、1章は藤原が、他は佐藤が執筆した。

引用・参考文献

- 伊東信雄（1950）：「東北地方の弥生文化」『文化』2巻4号
- 伊東信雄（1950）：「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』3
- 伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』
- 伊東信雄（1973）：「弥生文化」『水沢市史』
- 小川淳一（1979）：「玉造跡」宮城県文化財調査報告書 第58集
- 興野義一・遠藤智一（1970）：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下巻
- 須藤 隆（1970）：「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」文化 33巻3号
- 須藤 隆（1973）：「土器組成論」考古学研究 19巻4号
- 宮城県教委（1978）：「北沢遺跡」宮城県文化財調査報告書 第56号
- 白石市（1976）：「考古資料編」『白石市史』 別巻

投稿のお願い

機関誌刊行をより活発にするために会員内外の積極的な投稿を呼びかけます。

- 対象地域は宮城県を中心としますが、その他の地域でも構いません。
- 種類は、資料紹介（資料の量は問わず）を主に、論文、発掘調査ニュース、書評など。
- 原稿枚数は制限しません。原稿は横書です。
- 図版、写真版は、13.5×21cmの倍数です。
- その他の書き方は、「初」の1,2号に準じて下さい。

宮城県名取市手倉田遺跡出土の弥生土器

太田 昭夫

1

手倉田遺跡は、十三塚遺跡の立地する丘陵の先端部にあり、宮城県遺跡地名表（宮教委：1976）では十三塚遺跡の中に包括されている遺跡である。10年前に、市営の仮設野球場として遺跡の大半が整地された。ここに紹介する弥生土器は、その整地された地点から採集したものである。

2

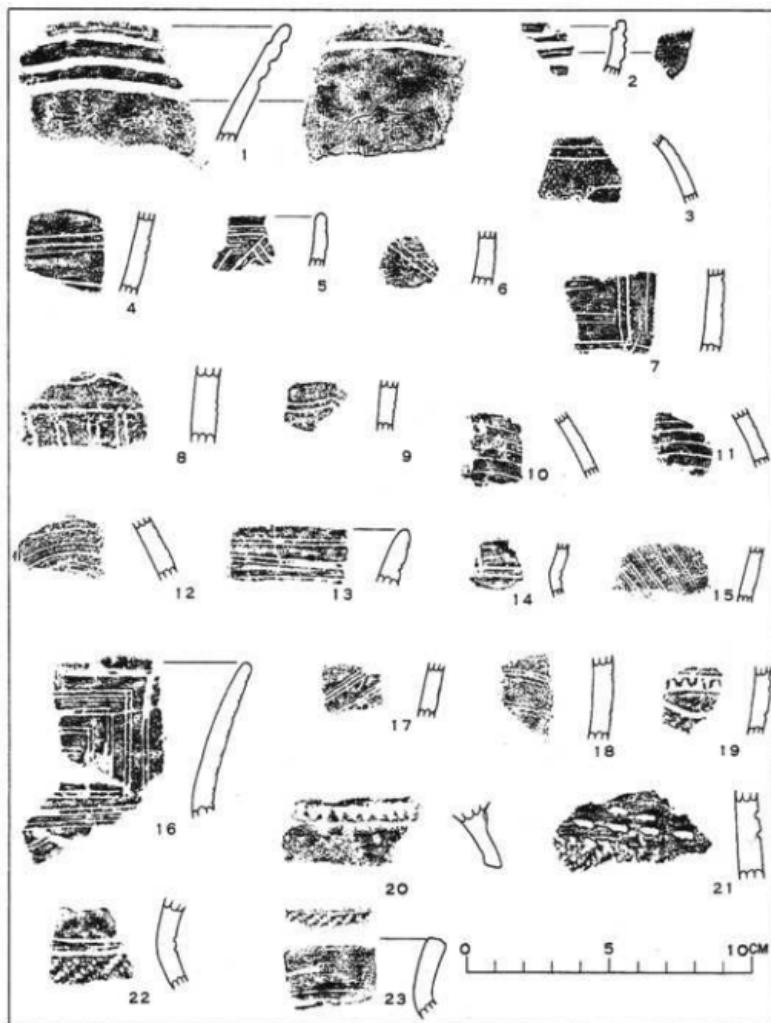
採集された弥生土器は、主に文様の特徴から8類に分けられる。

第1類（1. 2）は太い籠描き沈線によって文様が描かれているものである。ともに口縁に沿って、外面は數本の、内面は1本の沈線文が施されている。沈線の溝幅は3~4mmである。これ



に類似するものは十三塚遺跡からも出土しており(太田：1979)，福浦島下層式(伊藤：1966, 1969)に相当するものと考えられる。

第2類(3)は磨消繩文によって文様の描かれているものである。沈線の溝幅は1mmである。繩文の原体はLRである。細い沈線と磨消繩文手法からみて樹形図式(伊東：1955)に近いもの



手倉田遺跡出土土器

と考えられる。

第3類(4)は細い範描きの沈線で横方向の文様が描かれているものである。沈線の溝幅は1mmである。これは楔形圓式(伊東：1955)か円田式(伊東：1957, 伊藤：1966, 1969)に相当するものと考えられる。

第4類(5～16)は2本平行施文具によって、連弧文、同心円文、格子目文、山形文などが描かれているものである。沈線の溝幅は1～2mmで、2線間の距離は1.5～4mmとややばらつきがあるとみられる。これらは桜井式(伊東：1955)、十三塚式(伊東：1957)に相当するものと考えられる。

第5類(17, 18)は3本平行施文具によって文様が描かれているものである。沈線の溝幅は1mmである。これは、第4類とともに十三塚式とされているものに類似している(伊東：1957)。

第6類(19)は刺突波状文が描かれているものである。その下位にはLR繩文の施文後、太目の沈線文が施されている。これは刺突波状文などの特徴から天王山式に相当するものと考えられる(坪井：1953)。

第7類(20)は高杯の脚部の一部とみられるもので、脚部の上位に下方向からの刺突が連続的に施されている。高杯形土器は天王山遺跡でも出土しており、その中には脚部に刺突の施されたものもみとめられる(坪井：1953)。これから本類も天王山式に属するものと考えておきたい。

第8類(21～23)は壺の破片とみられるものである。21は頸部に2段に列突刺突文が施され、体部にはLR繩文が施されている。22は頸部に横方向に2本の沈線文が施され、体部にはLR繩文が施されている。23は口縁端部にLR繩文が施されている。これらについては時期は限定できない。

3

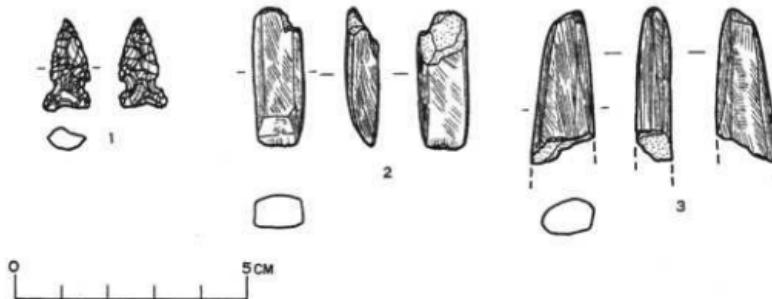
最後に第4, 5類について若干付け加えておく。第4, 5類は伊東信雄氏によって桜井式(伊東：1955), 十三塚式(伊東：1957)と型式設定されたものであり、これについてはその後、佐藤信行氏(佐藤：1967), 中村五郎氏(中村：1976), 馬目順一氏(馬目：1978)等によって細分が試みられている。その中で、平行施文具による文様において、2線間の距離が次第に狭くなること、時期が降るとともに2本から3本へと多条化の傾向がみられることなどが指摘されている。名取市内やその周辺からは、第4類のような2本平行施文具によって文様の描かれる土器が比較的多くの遺跡から出土している。これらには、本遺跡と同様に2線間の距離に多少のちがいがみられる例がある。また、第5類のような3本平行施文具によって文様の描かれる土器もいくつかの遺跡から発見されている。しかし、これらの資料はすべて断片的であり、これらが時

期差によるものかどうかについては、なお今後とも類似資料の増加を待ち、検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 宮城県教育委員会(1976)：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集
太田昭夫(1979)：「宮城県名取市十三塚遺跡出土の弥生土器」『初』創刊号
伊藤玄三(1966)：「東北」「日本の考古学」Ⅲ
伊藤玄三(1969)：「東北」「新版考古学講座」第4巻
伊東信雄(1955)：「東北」「日本考古学講座」第4巻
伊東信雄(1957)：「古代史」「宮城県史」第1巻
坪井清足(1953)：「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生文化の性格」『史林』第36巻第1号
佐藤信行(1967)：「山形県江俣弥生式遺跡」『古代』第48号
中村五郎(1976)：「東北地方南部の弥生式土器編年」「東北考古学の諸問題」
馬目順一(1978)：「入門講座・弥生土器—南東北4—」『考古学ジャーナル』No.156

弥生時代石器集成 1



名取市高館字南台・北台・鴻ノ巣に所在する今熊野遺跡から発見されたものである。

アメリカ式石鐵(1)：石質は黒曜石である。全面に調整刺離が施されている。

ノミ形石斧(2, 3)：2は頭部が欠損している。全面に調整痕とみられる擦痕がみとめられ、刃部は片刃に作られている。刃縁にはわずかな刺離と縦方向の細かい擦痕がみとめられるが、使用痕かもしれない。3は刃部が欠損している。全面に調整痕とみられる擦痕がみとめられる。

(太田昭夫) 実測者、保管者とも太田昭夫。

宮城県名取市宮下遺跡採集の弥生式土器について

興野 義一・石黒伸一郎

1

宮下遺跡は名取市愛島笠島字南東宮下に所在する。名取市の西方には遠く奥羽山脈に連なる標高200m前後の丘陵(高館丘陵)が続いている。この丘陵は第三系中新統の火山岩類(高館安山岩)からなり、その東端には利府へ続く構造線が走っている。高館丘陵の東側には標高30~50mの箕輪、野田山、飯野坂、小豆島等の小丘陵群(愛島丘陵)が突き出している。宮下遺跡は、小豆島丘陵中央より名取平野の南に舌状にのびた標高22mの台地に立地する。遺跡の範囲は、台地中央の平坦な地域と台地北西及び南東の水田に突き出している地域である。西側は竹林、他は畠地として利用されている。遺跡の最も高い部分は、標高22mあり、水田面との比高は約17mである(本誌12ページの地図参照)。

昭和49年に土取り工事によって破壊されることになり、発掘調査が宮城県教育委員会の手によって実施され、古墳時代~平安時代の堅穴住居跡43軒、掘立柱建物跡2棟、溝1本、江戸時代の墓塚8基が発掘された。弥生時代の遺構は確認されなかったが、円田、天王山式土器片、石窓丁、アメリカ式石鏃などが少量出土した。

周辺の弥生時代遺跡としては、泉遺跡(大泉~天王山式)、西野田遺跡(大泉~天王山式)、十三塚遺跡(大泉~十三塚式)、飯野坂遺跡(福浦島下層、樹形圓式)、今熊野遺跡(十三塚、天王山式)など数多く分布している。

ここに紹介する弥生式土器は、発掘調査終了半年後に訪れた時に、調査トレント南辺の遺物包含層セクションがブルドーザーによって少し破壊されておりそこから採集したものである(図版2-2)。その他に塙釜式土器片なども採集したが弥生式土器はこれ一片であった。(石黒伸一郎)

引用・参考文献

名取市教育委員会(1975) :「宮下遺跡」名取市文化財調査報告第1集

2

別稿、石黒伸一郎氏採集の名取市「宮下」出土の口頸部土器片(図版2-2)は、体部に三股の竹製フォークで波状の平行沈線文をひいた点で、東北地方南部の弥生式土器型式の桜井式(図版2-1 宮城県里浜出土。桜井式には二股フォークの施文もある)と共通点がある。

一方口縁端に施された交互刺突による波状の浮文は分布が東北地方全般にひろがる天王山式

(図版2-3宮城県上の原出土)に共通点がある。南北に細長く、気候条件の異なる東北地方の弥生式文化は、初期の段階において型式内容の地域差が著しかったが、終末期に近い天王山式になると南北一円に分布するようになる。宮下の土器片は桜井式の伝統をもったまま天王山式に転換したばかりの土器、すなわち東北地方南部の初期の天王山式土器ということができるのであるまいか。(奥野 義一)

底部に穿孔のある弥生土器

太田 昭夫

ここに紹介する弥生土器は、昭和45年行われた二屋敷遺跡の発掘調査の際に、現在東北歴史資料館に勤務する藤沼邦彦氏が地元の方からもらい受けたものである。現在は東北歴史資料館に保管されているが、今回藤沼氏の御好意によってここに紹介することができた。深く感謝の意を表したい。

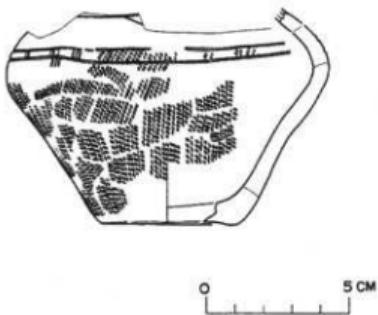
出土地は蔵王町宮に所在する二屋敷遺跡の西方付近と言うが、詳しい地点や出土状況については不明である。

そこは、白石川の支流である松川の形成した河川段丘上にあり、周辺には、長峰遺跡、明神裏遺跡、沢北遺跡、下別当遺跡など弥生時代の遺跡が数多く分布している(白石市: 1976)。

本土器は、口縁部が欠失している。器形は体部下半が外傾し、体部中央のやや上位で強く内側に屈曲する。形態的には、小形の壺形土器と推定される。現在高は7.5cm、底径は4.8cmである。外面の文様としては、体部下半は地文としての付加繩文(L R + 2 R)が横方向に施紋されている。屈曲部に一部はとぎれるが下半の付加繩文とを区画するように、1本工具による沈線が2本平行にめぐっている。その上位にも1本工具による沈線が認められる。その後、沈線施文部分はヘラミガキで調整されているが、それが徹底されず、沈線間に部分的に付加繩文が残る。体部内面は、ヘラ状のものでナデた後、荒いヘラミガキが施されている。また、成形時の粘土の積み上げの痕跡が認められる。焼成は良好で、胎土には砂粒を含むがそれほど多く

はない。色調は外面灰白色(部分的に黒みがある)、内面は浅黄橙色を呈する。底部のはば中央に径約2cmの大きさの孔が焼成後に穿たれている。その残存する底部の外面には、木葉痕が認められる(図版1)。

本土器は、器形や、一本工具による沈線文施文などの特徴からみて、同町西裏より出土し、円田式の標準資料として知られている、長頸の壺に近似する。このような一本工具による沈線文土器は特に蔵王町などに広く認め



られ、その地文に本土器と同じく、付加縄文を施文するのが比較的多い。

底部に穿孔のある弥生土器は、宮城県内及び近県から、それほど多くはないが出土している。これらはすべて焼成後に穿孔されている。県内では、南小泉遺跡、西台畠遺跡に出土例があり前者では合口甕棺及び蓋棺として使用したとみられる壺、壺の中に(伊東：1950)，後者では合口甕棺の蓋として使用されたとみられる台付鉢に(伊藤：1958)，底部穿孔が認められる。西台畠遺跡からは、その他にも底部穿孔のある小形壺が2点出土している。

岩手県常磐遺跡でも甕棺とみられる合口土器の1点に底部穿孔がみられる(伊東：1954)。

福島県では、陣場、鳥内、柏山、大畠G、天神原、愛谷、宮崎の各遺跡に出土例がみられる。鳥内、宮崎の両遺跡では複数の土器が埋設される小豊穴が多数発見されており、これらは再葬墓の性格を持つものと考えられている。鳥内遺跡では、その埋設土器の中に、底部穿孔のある大形壺が1点含まれていた(目黒：1971)。鳥内遺跡ではその他にも埋葬に関係するとみられるピット上から垂玉を納めた底部穿孔の壺が出土している。宮崎遺跡でも大形の壺に底部穿孔がみられる(周東、佐藤：1978)。柏山遺跡、陣場遺跡では墓としての性格をもった土壤が多く発見されており、その土壤に埋置したとみられる土器の中で、柏山遺跡では壺の(伊東他：1972)、陣場遺跡では、壺と鉢の底部に穿孔が認められる(馬目：1971)。

天神原、愛谷遺跡では、合蓋土器棺と呼称されている土器の中に底部穿孔がみられる。天神原遺跡では24基の合蓋土器棺の内、半数の12基の土器に、それも下方の正立した土器にのみ、底部穿孔が認められている(馬目他：1979)。

山形県では、堂森遺跡H地点に出土例がある。埋葬に関連のピットからの出土で、蓋と合口の形で発見されたと言う(加藤：1975)。この他にも同遺跡出土土器の中で、手塚孝氏蔵の合口土器の内、蓋の方に底部穿孔が認められる(まんぎり会：1977)。

以上が、県内及び近県において知り得た弥生土器の底部穿孔の類例であるが、これらから、底部穿孔土器の多くは、埋葬に関連性をもつてることがうかがわれる。したがって本土器も埋葬に関連した土器であった可能性が強い。また、これらの底部穿孔土器は大きく合口甕棺や合蓋土器棺のように、埋葬それ自体に使用された土器の中に見い出されるものと、土壤墓などに埋置された土器の中に見い出されるものに分けることができる。憶測ではあるが、本土器は小形の壺型土器という点で柏山遺跡の例に類似することから、後者の性格が強いと思われる。

引用・参考文献

白石市(1976)：『考古資料篇』『白石市史』別巻

- 伊東信雄(1950) :「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』Ⅲ
- 伊藤玄三(1958) :「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第44巻第1号
- 伊東信雄(1954) :「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」『古代学』第3巻第2号
- 目黒・柴田編(1971) :「鳥内遺跡発掘調査概報」
- 周東・佐藤(1978) :「第三次岩代国宮崎遺跡調査概報」
- 伊東信雄他(1972) :「柏山遺跡発掘調査報告書」
- 馬自順一(1971) :「岩代陣馬遺跡の研究」
- 馬自順一他(1979) :「天神原遺跡調査概報」
- 加藤 稔(1975) :「米沢市八幡原埋蔵文化財調査報告」第1集
- まんぎり会(1977) :「米沢の限始古代—I 遺物編」
- みちのく考古学研究会(1976) :「東日本弥生時代墓址集成」『遼光器』第10号

宮城県刈田郡蔵王町松川流域における 弥生時代遺跡の分布調査 (1)

須藤 隆・長谷川 真
相原 淳一・田中 敏

1 はじめに

東北地方における弥生時代の研究は、伊東信雄、杉原莊介をはじめとする多くの研究者の努力によって確実に進展してきたと言える。しかしながら、弥生時代における稲作農耕社会の歴史を再構成するために必要な資料は、この地方ではなお不充分である。弥生時代に、この地方でどのような構造をもった農耕社会が営まれたのか、その農耕社会はどのような過程を経て成立したのか、そしてどのように発展したのか、縄文時代における狩猟・漁撈・採集活動を基盤とする社会から初期農耕社会へ変革する過程、そして古墳時代の階級社会へ発展する過程など、究明しなければならない問題が山積している。

仙台市を西から東へ流れ、太平洋にそそぐ広瀬川の左岸、自然堤防上に立地する南小泉遺跡のように、規模も大きくなり安定した弥生時代農耕集落が成立していたと推定できる遺跡も知られている(村主: 1943, 伊東: 1950)。けれども、このような代表的遺跡においてすら、住居、貯蔵施設の構造、規模、配置関係など、集落の構造を知る手掛りは全く欠けている。また、集落を支えた労働・生産の場である水田やそれに伴う灌漑施設など農耕技術の実態も全く知らない。この時期の墓制については、若干の貴重な資料と研究がある(伊藤: 1958, 1961)。しかし、この場合でも、墓域全体の構造、集落と墓域の関係、墓制の変遷に関する研究は、やはり未踏の分野となっていると言わざるをえない。

生産用具については、石庖丁など、その一部が知られているにすぎない。農耕具は、全くその資料が欠けており、生産活動、特に農耕技術がどのような内容を持っていたかを究明するには、今後の資料探求と研究を持つほかはない状況である。

このように、東北地方の弥生時代農耕社会とその文化については、明らかにしなければならない幾多の問題をかかえている。

この地方の弥生時代研究にとって、現在、もっとも必要とされる方向は、次の4点にまとめられよう。

(1) これらの遺跡から出土する土器は、「型式」概念(鈴木: 1964)にまで、その認識内容が掲められることによって、一定の土器製作技術、装飾意匠の伝統を共有する集団が占有する生活領域を知る指標となる。そして同時に、技術・伝統の変化に基づく型式の差異は、相対的

編年の基準となる。このような土器型式の認識と、その変遷を把握し、各地域で型式編年を確立することが、重要な前提である。

- (2) それぞれの地域において、集落の構造、変遷を、生産の場や墓域などとも関連させ、総体的に捉えることを目指し、遺跡の分布状態・規模・立地条件など遺跡の在り方を踏査によって、丹念に資料収集することが、もう一つの重要な前提である。
- (3) 稲作農耕に関連する施設や用具など、農耕技術の内容を具体的に明らかにするためにも、個々の弥生時代遺跡において、周囲の微地形を、可能な限り詳細に把握しておく必要がある。
- (4) それぞれの地域において、弥生時代の文化内容を把握するために、遺跡・遺物に対するキメの細かい分析が必要であり、そのための方法論を確立する必要がある。

これらの諸点を踏まえ、各地域における地道な研究成果の蓄積が不可欠である。福島県郡山盆地で、1969、1970年に伊東信雄が計画し、実施した一連の弥生時代遺跡の発掘調査は、基本的には、このような研究目的をもって、組織的に進められたものと言える(伊東他: 1970, 1971)。また、興野義一は、宮城県北部の大崎耕地、江合・鳴瀬川流域において、長い年月にわたり、熱心に踏査を続け、この地域における弥生時代の研究に大きく貢献した。

興野氏の案内で、筆者も多くの弥生時代遺跡を、この地方でくり返し踏査する機会に恵まれた。以後、大崎耕地、阿武隈川下流域など、いくつかの地域における弥生時代遺跡の在り方に関心を払ってきた。現在、このような遺跡の在り方を捉える上で、踏査の必要をもっと強く感じている地域(水系)の一つに、阿武隈川の支流である白石川・松川流域がある。

この地方における弥生時代遺跡・遺物に対する研究・資料蓄積の歴史は比較的古く、片倉信光・佐藤庄吉・中橋彰吾などによって意欲的に進められてきた(片倉、中橋、後藤: 1976)。また、東北縦貫自動車道工事に伴なう事前調査によって、断片的ではあるが、若干の資料が増加した。(宮城県教育委員会: 1971, 1972)。けれども、この地域における弥生時代集落の研究は、なお進展がみられない。もっとも基礎的な研究である土器型式、その変遷の把握すら、従来の研究の枠を出ていない。伊東の設定した「円田式」(伊東: 1955)の標式資料は、一点の精巧なつくりの壺形土器である。この壺は、たしかに一つの土器型式の特徴をよく具現している。けれども、これに伴なうべき土器群—「円田式」—の実態は、現在のところ、必ずしも明確でない。今後、この土器群の土器組成(器種構成)、土器製作技術、施文、装飾方法などを解明し、土器型式として確立しなければならない。そのために、基準となる資料が必要不加欠である。

筆者は、このような認識のもとに、宮城県南部の白石市、蔵王町、村田町周辺における縄文時代終末から弥生時代にかけての遺跡を踏査する計画をたてた。この地方において遺跡の分布調査を進めてきた佐藤庄吉、中橋彰吾、阿子島香氏などの収集資料を観察する機会を得、相原淳一との綿密なうち合せの結果、1979年度の踏査地として、宮城県刈田郡蔵王町の永野地区を

選定した。

(須藤 隆)

2 遺跡踏査の方法

遺跡分布調査を進めるにあたり、遺跡の表面観察・遺物採集・記録方法の上で、いくつかの確認事項を設け、フィールドにのぞんだ。

- (1) 遺物は、可能なかぎり、畠地一筆、あるいは一区画毎に全面的に採集する。その区画毎に、A A, A B, …とアルファベット2文字で呼称を与え、採集地区の記録をとる。
- (2) 遺物が散布する台地、あるいは微高地など地形的「まとまり」を、区画毎に全面的に踏査し、遺物の散布の範囲を確認して、一遺跡とし、記録をとる。
- (3) すでに命名された遺跡名とその範囲については、これに基づいて、遺物の分布の確認を行って、これを記録し、名称、位置関係などにあらたな混乱を生じないように処理する。
- (4) 採集の単位となる畠地など区画毎に、その地目と利用状況を記録する。
- (5) 遺跡名は、小字名をもってあてる。同一小字内で、立地地形を異にしたりして明らかに別遺跡と判断される場合には、第Ⅰ遺跡、第Ⅱ遺跡、…と呼称する。同一遺跡内のブロックと判断される場合、あるいは本来同一遺跡であったものが、開田などによって分断されていると判断される場合には、遺物採集の都合上、A地点、B地点、…と地点名を与える場合もある。
- (6) 遺跡が立地する地形については、可能なかぎり、詳細に観察し、記録カードに記入し、写真撮影を行う。

3 遺跡踏査の概要

遺跡分布調査は、1979年4月3日から4月7日の5日間にわたって行った。調査には、相原淳一、田中敏、長谷川真、須藤隆の4名が参加した。

調査の対象とした藏王町の永野台地は、藏王連峰刈田岳(標高1795m)付近にある火口湖から流れ、東麓へと降る松川の左岸に形成された低位河岸段丘である。標高120mに達し、松川との比高は10m前後である。南北の幅約500m、東西長3kmに及ぶ、広々とした台地である。現在、台地の南半は、その大部分が開田され、本来の地形を失っている。県道(白石・青根・川崎線)の北側には、広々とした段丘が残っており、畠、果樹園として利用されている。台地の北側には、狭く、浅い開析谷をはさんで、永野台地よりも10m程高い上野原の丘陵がひろがる。この台地は、東西2km、南北200m程のひろがりをもつ。

今回の調査では、この広々とした台地のうち、わずかな地域しか対象としえなかった。永野台地では、寺門前、谷地、十文字、門前、円明院、西裏、東裏、下永野遺跡を踏査し、上野原台

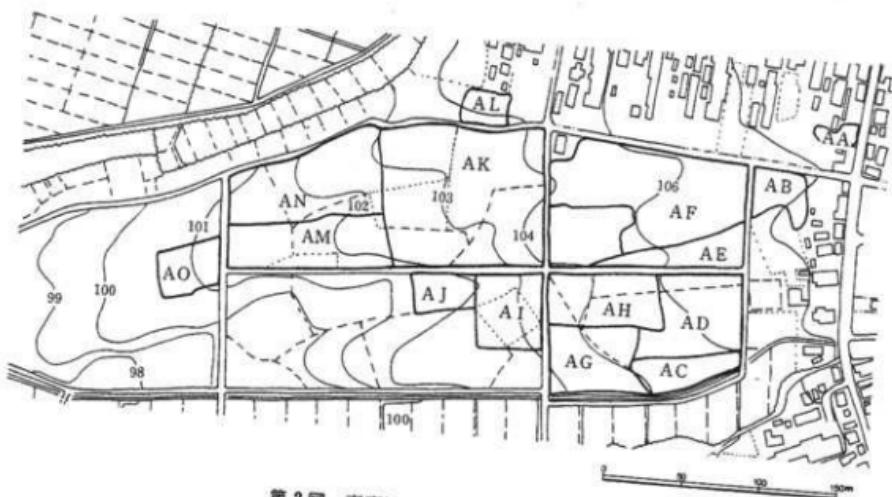
地では、天王畠遺跡を確認することができた。

以下、調査を行った遺跡についてその概要を記す。

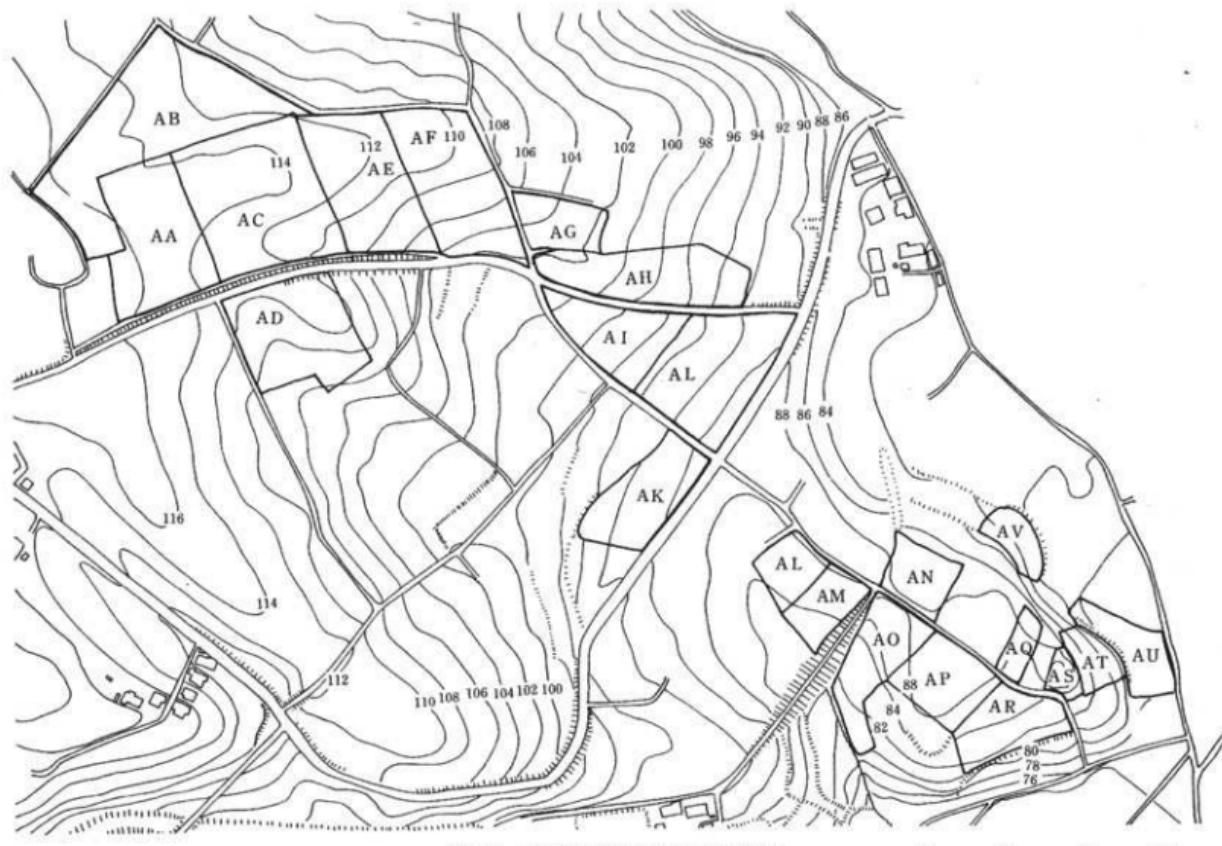
- (1) 寺門前遺跡(図1—1) 宮城県刈田郡蔵王町円田寺門前に所在する。永野台地のほぼ中央に位置し、円明院の門前一帯にひろがる。南北250m、東西250mに及ぶ。畑、果樹園として利用されており、一部は水田となっている。現時点で踏査することのできる範囲は、一通り表面観察をした。縄文時代中期から後期にかけての遺物が多量に散布している。
- (2) 谷地遺跡(図1—2) 同町円田谷地に所在する。県道(白石青根川崎線)をはさんで、寺門前遺跡の南にひろがる。今回は南北130m、東西60m程の範囲を踏査したにとどまる。地形の上では、東西におよび遺跡の範囲がひらくと推定される。寺門前遺跡と一体の遺跡として捉えることもできる。縄文時代中期から後期にかけての遺跡である。
- (3) 十文字遺跡(図1—3) 同町円田十文字に所在する。永野台地の段丘崖付近に位置する。かって、相原が確認した十文字遺跡の東南部分にあたる。東西約40m、南北約30mの範囲に遺物の散布をみた。北側は開田によって削られており、そのひろがりは不明である。縄文時代中期の遺物と、奈良・平安時代の土師器が採集されている。
- (4) 円明院遺跡(図1—5) 同町円田円明院に所在する。円明院の裏手、永野台地の北側を開析する幅30m程の沢、沖積面をはさんで対岸に振り出す小台地上に位置する。南北50m、東西100m程の範囲を踏査した。縄文時代中期、奈良・平安時代の遺物が散布している。
- (5) 西裏遺跡(図1—6) 同町円田西裏に所在する。蔵王町役場の西方の台地上にひろがる。県道の南側は開田で一段低く削平されている。遺物は、今回の踏査で南北150m、東西400mにわたって散在し、いくつかの比較的密度の高い地域がある。遺跡の北側は地形的に浅い開析谷で途切れ、両側は寺門前遺跡との間100m程では遺物の散布がみられなかった。「円田式」の標式資料である壺形土器の出土遺跡である。弥生式土器片は、少量ではあるが、遺跡の東部に散在している。縄文時代中期の遺物が多数採集されている。
- (6) 東裏遺跡(図1—7) 同町円田東裏に所在する。蔵王町永野部落の東南方にひろがる。松川左岸の永野台地東南端付近にあり、東西150m、南北350mに達する(図2)。東西両側に浅い開析谷がひび、細長く南へのびる舌状台地に遺跡は立地し、地形的にはまとまりがよい。遺物は、いくつかの分布のまとまりをみせているが、中央部北東よりの畠地(AH区)において、特に弥生土器の散布が著しかった(表1)。縄文時代中期、後期、弥生時代「円田式」期、古墳時代の遺物や奈良・平安時代土師器、須恵器などが散布している。
- (7) 下永野遺跡(図1—8) 同町円田下永野に所在する。東裏遺跡が立地する舌状台地の南に位置する低い独立丘陵上にある。開田、用水路改修工事で本来の地形は大きく姿を変えている。わずかに土師器片の散布がみられるが、そのひろがりは確認できなかった。



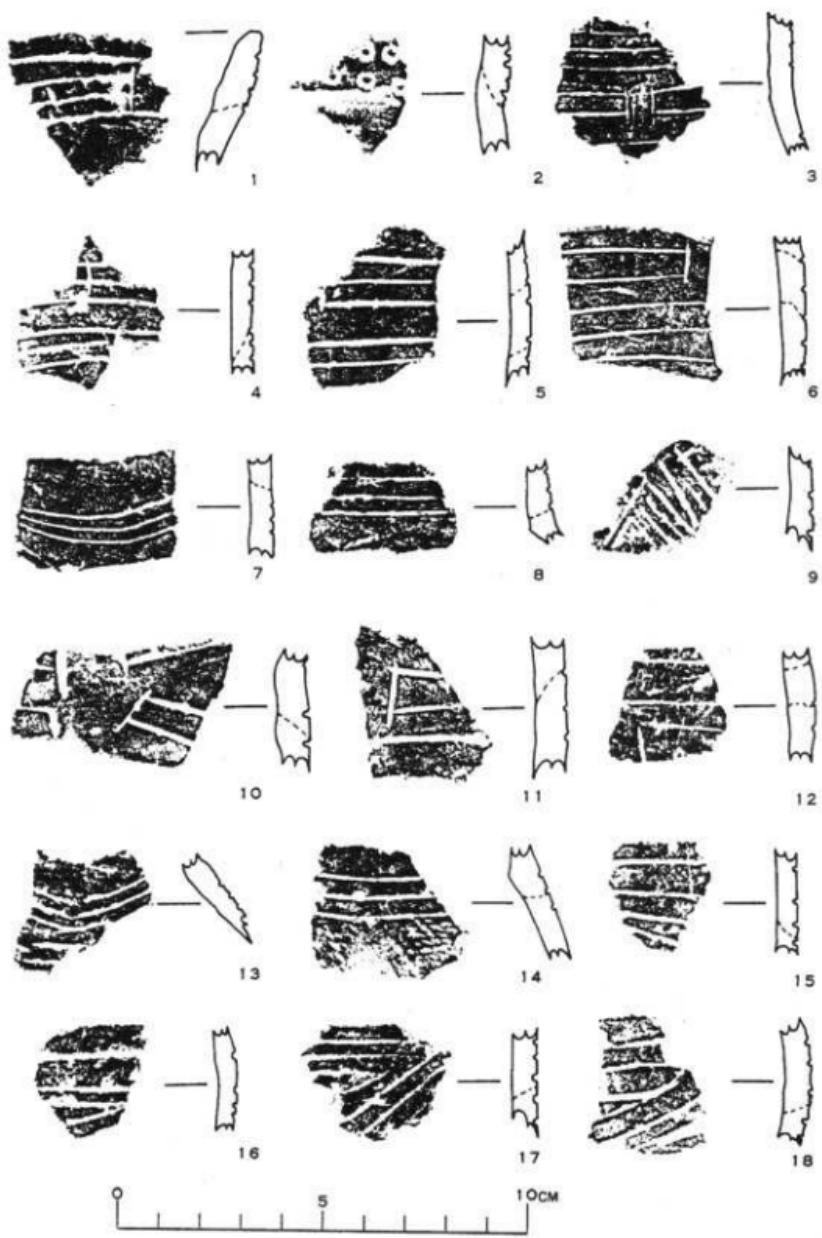
第1図 遺跡分布図



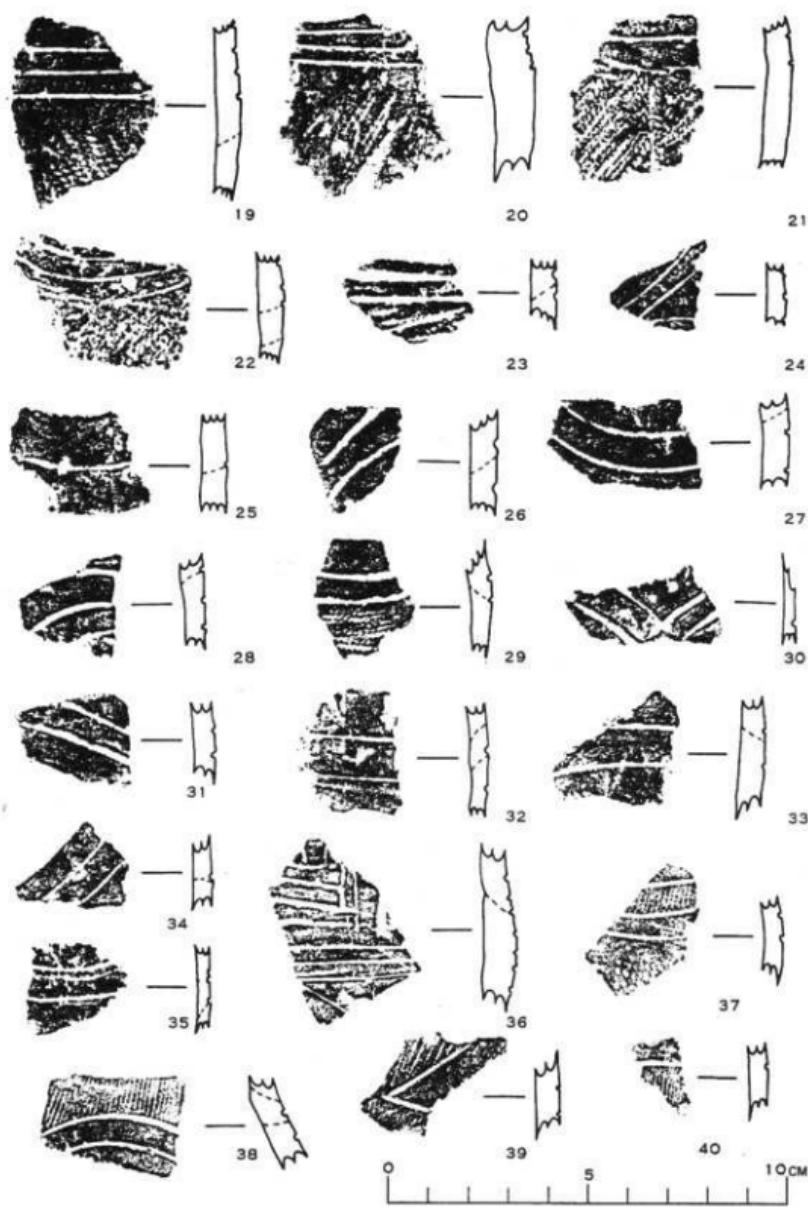
第2図 東裏遺跡分布調査実施地点図



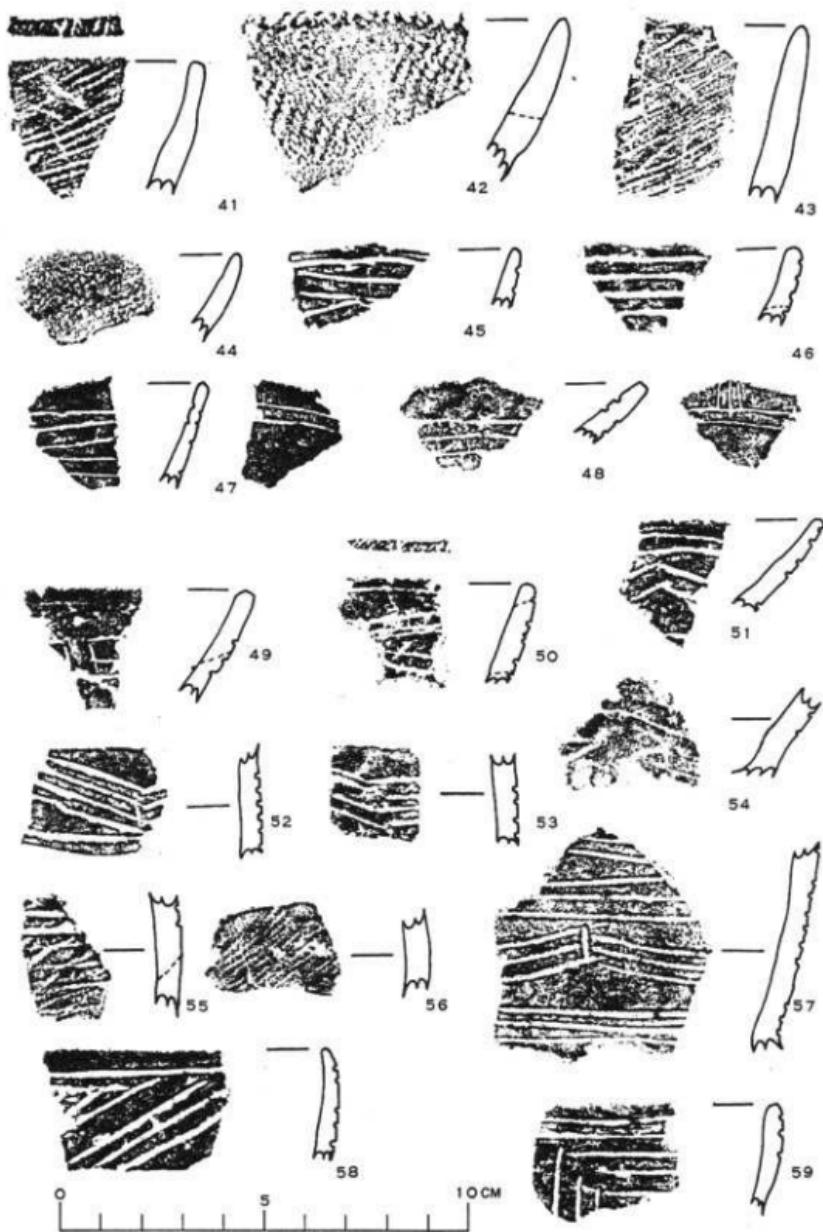
第3図 天王開遺跡分布調査実施地点図



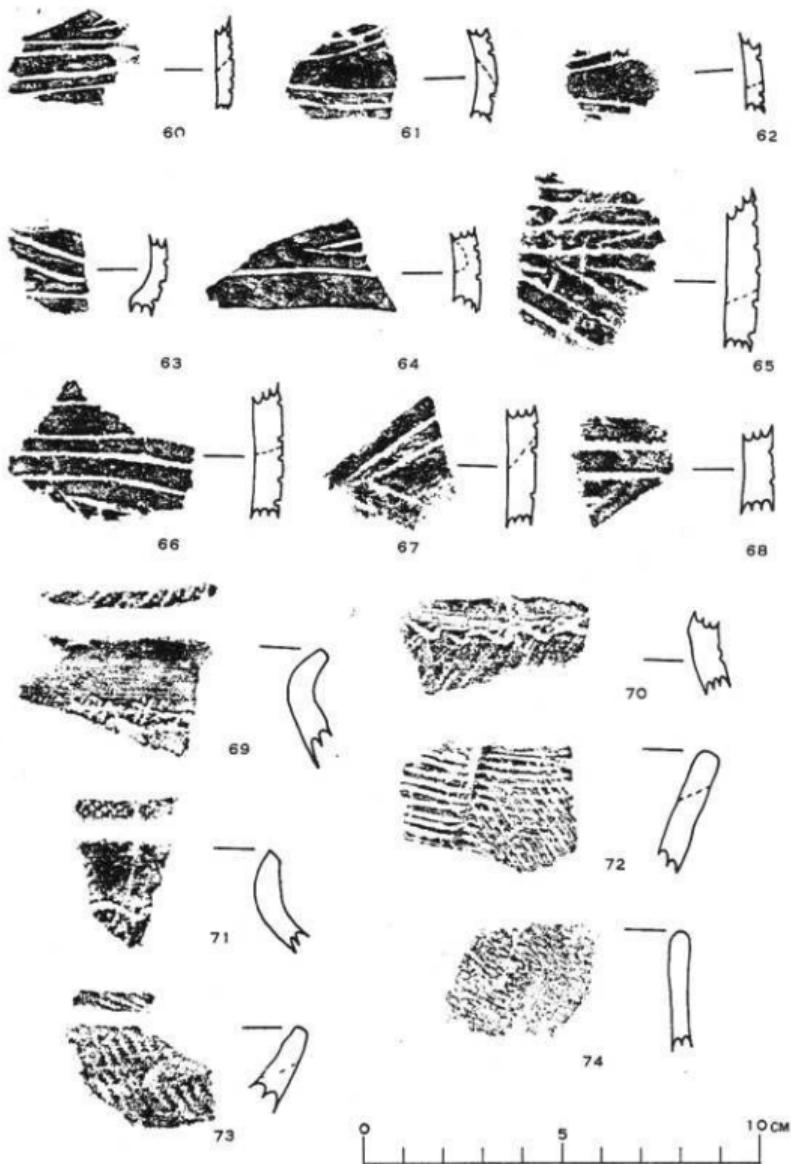
第4図 採集土器拓本(1)



第5図 採集土器拓本(2)



第6図 採集土器拓本(3)



第7図 採集土器拓本(4)

(8) 天王圓遺跡(図1-9) 同町円田塙沢に所在する。上野原台地の東部に位置する。今回踏査できたのは、南北300m、東西80m程の範囲である(図3)。広い範囲にわたって遺物の散布がみられる(表2)。踏査範囲の南端(A S区)に天王古墳(直径約28mの円墳)がある。縄文時代から奈良・平安時代までの遺物が散布している。特に、遺跡の東南部分(A N, O, P区)には、多数の弥生土器が散布していた。

この他に、いくつかの地点で遺物の採集が行われたが、遺跡の範囲を確認できなかったため、今回はふれない。

5 遺物について

今回の踏査によって採集された遺物は、かなりの量となった。ここでは、遺跡での分布状況などが把握できた東裏遺跡と天王圓遺跡の弥生土器についてふれる。それぞれの遺跡における遺物の分布状態を表1, 2に示した。

弥生土器は、東裏遺跡では228点、天王圓遺跡では217点が採集されている。このうち、土器の形態、装飾・施文手法などを理解することができる資料は、東裏遺跡で77点、天王圓遺跡では78点ある。このうちから74点を取り出して図示した。今回は分析の都合から、両資料を一括して扱い、器形別に示した。出土遺跡および地区は観察表(3, 4)の末尾に記した。

その器種には、壺形土器(図4-1~18, 5-19~40)、鉢形土器(図6-45~54)、口縁頸部が長く、わずかに内彎し、頸部がかるくびれる鉢形土器(図6-57~59)、浅鉢あるいは蓋形土器(図6-41~44)、甕形土器(図7-69~74)などがみられる。仙台市南小泉遺跡、藤原町大橋遺跡(宮城県教育委員会: 1971)、柴田郡村田町北沢遺跡(宮城県教育委員会: 1978)、福島県郡山市柏山遺跡などから出土した資料でもって、その形態を確認できる。

これらの採集資料の施文手法をみると、幅1, 2mmの細い箋描沈線文が圧倒的に多い。連弧文、重方形文、渦文、短形文などがみられる。竹管刺突文(図4-2)が天王圓遺跡から出土している。磨削縄文、あるいは充填縄文手法(図5-37, 39)をもつものもわずかに含まれている。地文の縄文は、L^R{R, R{L(稀)、撚糸文(L, R)、異条縄文などがみられる。樹形圓式にしばしばみられる植物茎を回転した擬似縄文(図5-38)も含まれている。

図4-2の如きやや異質なものも含まれているが、東裏遺跡と天王圓遺跡の採集資料の間に差異は認められない。いずれも大橋遺跡や北沢遺跡出土資料とよく共通した特徴をもっている。これらの特徴の多くは、「円田式」の壺形土器(伊藤: 1966)にみられる特徴もある。

個々の土器製作手法の観察については、表3, 4にまとめて記述した。

(長谷川 真・須藤 隆)

6 結 語

今回踏査を行った水野地区において、9遺跡のうち、3遺跡が弥生時代遺跡であることを確認した。西裏遺跡では、遺跡の東端付近でわずかに弥生土器片を採集した。東裏遺跡では、その東北部分(AH区)に弥生土器の散布がみられ、低い舌状台地平坦面の中央付近にあたるこの一帯に、遺構、包含層のひろがりが推定される。また、この遺跡は、原地形を比較的よく保持していると判断された。天王岡遺跡では、遺跡の東南部に弥生土器の散布が著しかった。上野原台地の東南へ張り出した舌状台地上に、弥生時代の遺構や包含層がひろがっていると推定される。この遺跡も比較的よく原地形が残されている。

採集された資料は、2遺跡とも共通した内容をもった弥生土器である。伊東信雄の設定した「円田式」に相当すると判断される。

ある地域を調査対象地として選定し、その地域一帯の弥生時代遺跡のあり方を調査することは、すでに述べたように、考古学的研究の基本である。このような視点から地域研究の一步を踏み出した段階で、結論的なことを記すことは避けなければならないが、それでも、同一時期に属すると推定される弥生時代遺跡が、この松川流域において、かなり近接して群在している様相の一端をうかがうことができたと言える。また、その立地も、この地域の地形が複雑であることにもよるが、さ程一樣ではないと言える。時間的に極めて限られた踏査であったため、対象とした水野、上野原台地のわずかな部分を一巡したにすぎない。この地域における踏査を、今後、機会をとらえてくり返してゆきたい。記録方法、踏査方法など、実際に現地に臨んで不備な点が多かった。それらの点については、今後の踏査で改めてゆかなければならぬと考えている。

この踏査を計画・実施するにあたって、藏王町教育委員会社会教育課、佐藤清志氏、中橋彰吾氏、阿子島香氏にお世話をなった。また、資料の整理には、荒俣省子、岩屋淳、飯塚晴夫、佐久間光平、須田良平、林勉君の協力をえた。記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献(アルファベット順)

- 伊藤玄三(1958) :「仙台市西合畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44-1 PP 11-28
伊藤玄三(1961) :「東北日本における弥生時代の墓制」『文化』25-3 PP 50-80
伊藤玄三(1966) :「弥生文化の発展と地域性—東北一」『日本の考古学』 III PP 204-220
伊東信雄(1950) :「南小泉石器時代遺跡」『仙台市史』3 PP 13-31
伊東信雄(1955) :「東北」『日本考古学講座』4 PP 112-118
伊東信雄・須藤 隆・木本元治(1971) :『郡山市福良沢遺跡発掘調査報告書』
伊東信雄・須藤 隆(1972) :『郡山市柏山遺跡発掘調査報告書』
片倉信光・中橋彰吾・後藤勝彦(1976) :『白石市史』別巻

宮城県教育委員会(1971)：『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報<刈田郡蔵王町地区>』

宮城県教育委員会(1972)：『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報<白石市・柴田郡村田町地区>』

宮城県教育委員会(1978)：『北沢遺跡発掘調査概報』

村主岩吉(1943)：「仙台市東郊—仙台飛行場を中心とする弥生式文化の研究—」『古代文化』14—5

PP1—36

鈴木公雄(1964)：「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』 21 PP1—5

表1. 東裏遺跡探集遺物一覧表

	土 器				須 惠 器	そ の 他
	縄文土器	弥生土器	土 師 器	時期不明		
AA	1					
AD	13	7	6		2	
AE				1		
AF	4	5	4	9		
AG		4	7	3		
AH	1	203	22	30		
AI	2	8	22	16	11	
AJ			1		7	
AK	5			12		
AL				2		
AM		1	2	4		
AN			1			
AO			2	3		
計	26	228	67	80	20	

表2. 天王圓遺跡探集遺物一覧表

	土 器				須 惠 器	そ の 他
	縄文土器	弥生土器	土 師 器	時期不明		
AA	9	5	22	16		
AB				1		
AC			2			
AD		1	6			
AE	2	3		1		
AF	4	8		3		
AG	1	7				
AH	2	4		1		
AI	2	1	204	1	34	フレイク(1)
AJ			125		11	
AK			5			
AL		3	12			
AM	1	4	22		1	石 起(1) 塙輪円筒(1)
AN	3	110	64	5	2	土製円板(1)
AO	1	29	50		1	フレイク(1)
AP	1	35	49			
AQ	1	5	4			
AR		11	15			
AS			2			
AT	2	1	8	1	1	石 起(1)
AU			1			埴輪円筒(1) ピエス・エスキュー(1)
AV		3	3			凹 石(2)
計	20	217	616	43	52	

表3. 採集土器観察表(1)

No	器種	外 面	内 面	遺跡・地点
1	壺	ミガキ→沈線	ミガキ	TN・AN
2	壺	全面タテ方向ナデ→二重口縁部ヨコナデ→竹管文	ナ デ?	TN・AP
3	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	TN・AN
4	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AH
5	壺	ナデ→沈線ミガキ	ナ デ	HU・AH
6	壺	ミガキ→沈線	ケズリ→ナデ	HU・AH
7	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ナ デ	TN・AO
8	壺	ヨコナデ→沈線とし〔フ 繩文	不 明	HU・AH
9	壺	ナデ→沈線	ナ デ	TT・AQ
10	壺	ナデ(ヨコ方向)→沈線→ミガキとナデ(タテ方向)	ナ デ	HU・AH
11	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AH
12	壺	ナデ→沈線	ナ デ	HU・AH
13	壺	ナデ→沈線	刷毛目→ナデ	TN・AN
14	壺	ナデ→沈線とし〔フ 繩文	ナデ→ヘラナデ	TN・AN
15	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	TN・AN
16	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AH
17	壺	ナデ→沈線	ナ デ	HU・AI
18	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ナ デ	TN・AA
19	壺	L〔フ 繩文と沈線→ミガキ	ナデ→ミガキ	HU・AH
20	壺	L〔フ 繩文?とナデ→沈線	ナ デ	TN・AP
21	壺	ナデ→L〔フ 繩紋と沈線→ヨコナデ→ミガキ	ナ デ	TN・AN
22	壺	ヨコナデ→沈線→L〔フ 繩文	ヘラナデ	TN・AT
23	壺	Rの撚糸→沈線→ナデ	ナ デ	HU・AH
24	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ナ デ	TN・AN
25	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AH
26	壺	ナデ→沈線	ナ デ	HU・AH
27	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AH
28	壺	ナデ→沈線	ケズリ	HU・AH
29	壺	ナデ→沈線とし〔フ 繩文→ミガキ	不 明	HU・AH
30	壺	ナデ→沈線	ナ デ	TN・AQ
31	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AH
32	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ナ デ	HU・AI
33	壺	沈線→ミガキ	不 明	TN・AN
34	壺	沈線→ミガキ	ナ デ	TN・AN
35	壺	ナデ→沈線	不 明	TN・AN
36	壺	ナデ→沈線→ミガキ	ケズリ→ナデ	TN・AO

表4 採集土器観察表(2)

No	器種	外 面	内 面	遺跡・地点
37	壺	沈線→L [繩文→ナデ→ミガキ →擬似縄文	ケズリ→ナデ	HU・AH
38	壺	擬似縄文→沈線→ミガキ	ナデ	HU・AH
39	壺	ナデ→沈線→L [繩文→ミガキ	ナデ	HU・AH
40	壺	沈線→ミガキと擬似縄文	ナデ	TN・AN
41	鉢(蓋?)	ナデ→L [繩文	ケズリ→ミガキ	HU・AH
42	鉢(蓋?)	ヨコナデと縦方向ナデ→L [繩文	ヨコナデ	TN・AP
43	鉢(蓋?)	L [繩文	ナデ	HU・AH
44	鉢(蓋?)	ナデ→L [繩文→ミガキ	ナデ→ミガキ	HU・AH
45	鉢	ナデ→沈線	ナデ	HU・AH
46	鉢	沈線→ミガキ	ミガキ	TN・AN
47	鉢	ナデ→沈線→ミガキ	ナデ→沈線→ミガキ	HU・AH
48	鉢	ナデ→沈線	ナデ→沈線→ミガキ	HU・AH
49	鉢	ヨコナデ→沈線→縦方向のナデ	ヨコナデ	TN・AN
50	鉢	沈線と口唇部のL [繩文→ミガキ	ミガキ	TN・AN
51	鉢	ナデ→ヨコナデ→沈線	ケズリ→ナデ→ヨコナデ	TN・AO
52	鉢	ナデ→沈線	ナデ	HU・AH
53	鉢	ナデ→沈線	ミガキ	TN・AP
54	鉢	ナデ→沈線	ナデ	HU・AD
55	?	L [繩文→沈線→ナデ	ケズリ→ミガキ	HU・AH
56	?	R [繩文→ナデ	ナデ→ミガキ	HU・AH
57	鉢	ナデ→沈線	ナデ	TN・AN
58	鉢	ヨコナデ→沈線ミガキ	ヨコナデ	HU・AH
59	鉢	ナデ→沈線	ナデ	TN・AN
60	壺?	ナデ→沈線→ミガキ	ミガキ	TN・AP
61	壺?	沈線→ミガキ	ナデ	TN・AN
62	壺?	ナデ→沈線	ナデ	TN・AP
63	鉢?	ナデ→沈線→ミガキ	ケズリ→ミガキ	HU・AH
64	?	ヘラナデ→沈線	ナデ→ミガキ	HU・AH
65	?	沈線→ミガキ	刷毛目→ミガキ	TN・AT
66	?	ナデ→沈線→ミガキ	ナデ→ミガキ	HU・AH
67	?	沈線→ミガキ	ナデ→ミガキ	TN・AN
68	?	刷毛目→沈線→ミガキ	ヘラナデ	TN・AN
69	壺	ヨコナデ→L [繩文	ミガキ	HU・AH
70	壺	ヨコナデ→L [繩文	ミガキ	HU・AH
71	壺	ヨコナデ→R [繩文	ヨコナデ	HU・AH
72	壺	ナデ→Rの纏糸	ナデ	TN・AR
73	壺	R [繩文→ナデ(一部)	ナデ	TN・AR
74	壺	L [繩文→ナデ	ナデ	HU・AH

第1回学習会記録

第1回目の学習会は、昨年1979年の6月16日に仙台の教育会館を会場に行われた。参加者は約30名であった。テーマは、「東日本の再葬墓について」(レポーター 須藤 隆氏)と「弥生土器一福浦島下層式をめぐって」(レポーター 佐藤信行氏)である。前者は須藤氏の永年の研究成果であり、再葬墓という墓制の分析を通して弥生時代の社会にせまるという、極めて興味深いものであった。なお、この成果については、「文化」第43巻第1、2号(東北大学史学部)の中に発表されている。後者の弥生土器の学習は、本会の設立時の課題の一つであり、今回は宮城県において最も古いと考えられている福浦島下層式に焦点をあてた。しかし、事務局側の事前の打ち合せが不徹底だったことに可会の不慣れさも加わり、十分に学習を発展させることができなかった。参加者の皆さまに深くお詫びいたします。このテーマについては再度学習する必要性を確認しました。

編集後記

「初」2号がやっとでき上がった。予定を半年も遅れたことをお詫びします。始めるよりも続けることが難しいと感じている今日このごろです。

ページの空白を埋めるという意図もあって、今回から石器集成を始めた。今後、皆様の協力を得て、多くの石器を掲載していきたい。

遺跡地名表は、今回は須藤氏による蔵王町内の分布調査報告に代えた。一地域の詳細な分布調査は、遺跡の性格把握という点できわめて重要なことと思われる。今後とも継続して調査し、その成果を公表していく予定である。

次号の原稿締め切りは今年の10月末にしたい。

なお、伊東信雄先生をはじめ、白鳥良一、岡村道雄、渋谷正三の各氏から資金面でのご援助をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

初(MOMI) 第2号

1980年4月20日 印刷
1980年4月30日 発行

発行 弥生時代研究会
事務所 東京都葛飾区新宿2-216-73 佐藤信行

編集 太田昭夫 小川淳一

印刷 有)平電子印刷所 美術写真印刷研究室
いわき市平北白土字西ノ内13番(0246)23-9051
